

鼓動を打つように、描いた。

日本・スイス国交樹立150周年記念  
フェルディナント・

# ホドラー展

スイスの巨匠、その全貌に迫る大回顧展

FERDINAND  
HODLER

Towards Rhythmic Images

2015年1月24日 [土] - 4月5日 [日]



阪神・淡路大震災20年展

日本・スイス国交樹立150周年記念

## フェルディナント・ホドラー展

Ferdinand Hodler - Towards Rhythmic Images -

### 展覧会概要

スイスを代表する画家、フェルディナント・ホドラー(1853-1918)は、個性的な群像表現による、装飾的かつ象徴主義的な作風によって、19世紀末から20世紀にかけてのいわゆる「世紀転換期」の時代が持つ不安に満ちた雰囲気の色濃く描き出しました。一方でホドラーの描くスイスの風景は、自然を明確に秩序立てた装飾的な傾向を示しています。その作品は、日本でも1910年ごろから雑誌などで紹介され、岡山・大原美術館に収蔵されるなど早くから広く愛されてきました。

本展は、1864年に日本とスイスとの間で修好通商条約が結ばれてから150年を記念して、スイス大使館と首都ベルンにあるベルン美術館の全面的な協力を得て、日本国内では約40年ぶりに開催するものです。精神性の高いホドラーの作品は、混迷した現代の人々、とりわけ阪神・淡路大震災から20年を経て力強く復興してきた兵庫県民に、新たな関心と感銘を呼び起こすものと期待されます。

本展では、スイス国内の美術館及び個人が所蔵するホドラーの代表的な油彩画、素描等あわせた総出品点数約90点により展覧します。

### 会期等

2015(平成27)年1月24日〔土〕～4月5日〔日〕

休館日：月曜日

開館時間：午前10時～午後6時

※金・土曜日は夜間開館(午後8時まで)

※入場は閉館の30分前まで

会場：兵庫県立美術館 企画展示室

主催：兵庫県立美術館／NHK神戸放送局／NHKプラネット近畿／神戸新聞社

共同企画：ベルン美術館

後援：外務省／スイス大使館／兵庫県／兵庫県教育委員会／

神戸市／神戸市教育委員会／Kiss FM KOBE

特別協力：ジュネーヴ美術・歴史博物館

協賛：スイス・リー・グループ／大日本印刷／中外製菓

助成：スイス・プロ・ヘルヴェティア文化財団／サカエ・シュトゥンツィ基金

協力：スイス政府観光局／スイス インターナショナル エアラインズ／ネスレ日本／

ルフトハンザ カーゴ AG／ユングフラウ鉄道グループ／ホテルオークラ神戸



1.《バラのある自画像》1914年 シャフハウゼン万聖教会博物館

### フェルディナント・ホドラー (1853-1918)

19世紀末から20世紀初頭にかけてのスイスの象徴主義を代表する画家で、母国では今日でも「国民画家」として親しまれています。その力強い線描、大胆な賦彩、リズムミクな構図は、大型の油彩画やフレスコ壁画など、とりわけ装飾的な大画面に効果を発揮しています。一方、身近なアルプスの自然も、この画家の想像力の源泉でありつづけました。

### 観覧料金

一般1,400(1,200)円 大学生1,000(800)円

高校生・65歳以上700(600)円 中学生以下無料

※( )内は、前売および20名以上の団体割引料金

(高校生・65歳以上は前売なし)

※障がいのある方とその介護の方1名は各当日料金の半額

(65歳以上を除く)

※割引を受けられる方は、証明できるものを持参のうえ、会期中に美術館窓口で入場券をお買い求めください。

※県美プレミアム展の観覧には別途観覧料金が必要です。

(本展とあわせて観覧される場合は割引あり)

※主なチケット販売場所：チケットぴあ(Pコード766-435)、ローソン(Lコード54324)、ファミリーマート、セブンイレブン(セブンコード033-895)、サークルK・サンクス、イープラス、CNブレイガイドほか。

※前売券の販売は11月20日〔木〕から1月23日〔金〕まで。会期中は販売しません。

※詳しい情報は当館ホームページをご覧ください。

## 展覧会構成

### 1. 光のほうへ—初期の風景画

1853年にスイスのベルンに生まれたホドラーは、7歳で父を亡くしたのち、母の再婚相手だった画家のもとで、幼くして絵画の手ほどきを受けました。14歳でトゥーンの風景画家フェルディナント・ゾンマーに弟子入りすると、1871年からはジュネーヴでバルテレミー・メンに師事し、フランスの写実主義やバルビゾン派の絵画に傾倒します。こうして風景画家として出発したホドラーは、19世紀のスイスで慣習的だった風景表現からはすぐに脱し、新たに戸外の光のもとで、みずからの眼に映る世界を描くようになります。1878年にはスペインなどを旅し、故郷スイスでは感じることでできない地中海世界の強い光も経験します。さらに1880年代以降の作品には、後年のホドラー自身の絵画を予告する、湖面に反射／反映する木々などのイメージが現われてきます。

### 2. 暗鬱な世紀末？—象徴主義者の自覚

若きホドラーの日々には、暗い影がつきまどっていました。少年期から青年期のホドラーの傍らには、つねに「死」があったからです。1885年までに彼は、父ばかりでなく、母と兄弟のすべてを結核のため失っています。ジュネーヴの詩人ルイ・デュショールとの出会いなどを機に、1880年代半ばから、眼に見える世界よりも、眼には見えない人間の内面や精神活動を重視する象徴主義の思想へと急速に接近します。その結果、1880年代のホドラーの絵画には、「憂鬱」や「内省」、そして「死」のイメージがくりかえし描かれることとなります。

### 展覧会のみどころ

#### ●世紀末芸術を代表するスイスの巨匠・ホドラーの全容を紹介

スイスの「国民画家」として絶大な人気を集めたホドラー。ホドラーの力強く壮大なヴィジョンは、19世紀末の象徴主義を語るうえで、重要な地位を占めています。

#### ●日本では40年ぶり。日本初公開を含む最大規模の回顧展

日本で40年ぶりに開催される本展は、《昼III》など、日本初公開となる大作が出品される過去最大規模の回顧展となります。

#### ●「リズム」の絵画へ—死から生への目覚め

ホドラーの芸術を「リズム」という視点から読み解きます。彼は若くして、両親や兄弟を失くしました。しかし、20世紀への転換期をさかいに、ホドラーは「死」よりも「生」のイメージ、とくに人々の身体が織りなす「リズム」の表現に向かいます。

#### ●スイス・アルプスの自然—想像力の源泉

身近なスイス・アルプスの自然は、つねにホドラーの想像力を刺激する対象でした。四季や天候に応じてさまざまな表情を見せるアルプスの自然に秩序やパターンを見だし、それらを抽象化することで、現実の景色でありながらもファンタジックな、独自の風景画をつくり上げていきました。



2. 《昼 III》1900 | 10年頃 ルツェルン美術館  
 Museum of Art Lucerne, depositum of the Bernhard Eglin-Stiftung  
 ©Andri Stadler



3. 《傷ついた若者》1886年 ベルン美術館  
 Kunstmuseum Bern, Geschenk des Künstlers

### 3.リズムの絵画へ―踊る身体、動く感情

人間の内面や心理に惹かれ始めたホドラーは、単に暗鬱した世界に閉じこもったわけではありませんでした。「良きリズム」という意味をもつ《オイリュトミー》(1895年)以降、ホドラーは、身体の動きによって表わされる人間の感情、そして運動する身体が織りなす「リズム」の表現に向かいます。このようなホドラーの関心は、スイスの音楽教育家エミール・ジャック＝ダルクローズによる「リトミック」など、当時生まれつつあった前衛的な舞踏の思想とも呼応するものでした。ホドラーはまた、自然の世界にはさまざまな秩序が隠されており、とりわけ類似する形態の反復や、シンメトリーをなす構造がいたるところに存在すると考えていました。彼はそれを「パラリズム」(平行主義)と呼び、絵画のシステムとして応用していったのです。



4.《恍惚とした女》1911年 ジュネーブ美術・歴史博物館  
 ©Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève  
 © Photo : Bettina Jacot-Descombes



5.《感情III》1905年 ベルン州美術コレクション ©Kanton Bern (Prolith AG, Bern)



6.《オイリュトミー》1895年 ベルン美術館 Kunstmuseum Bern, Staat Bern

#### 4. 変幻するアルプス—風景の抽象化

世界の中にリズムや構造を見出そうとしたホドラーは、スイス・アルプスの自然からも、絶えず想像力を刺激されていました。「もっとも強い幻想は、無尽蔵の啓発の源泉たる自然によって養われる」—彼はそう語っています。そして1900年代以降、眼に映る風景を、次第に抽象化していきます。そこでは、山々の輪郭、湖面に映るシルエット、あるいは雲などが、一種の装飾的な図柄を構成する造形要素のようにして扱われます。たとえば、ホドラーがくりかえし描いたユングフラウ山やシュトックホルン山群、レマン湖といったアルプスの風景は、もはや再現的であることを超えて、抽象化された形態と色彩のパターンとして表わされるのです。



7. 《シェーブルから見たレマン湖》1905年頃 ジュネーヴ美術・歴史博物館  
 ©Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève ©Photo: Yves Siza



8. 《ミュレンから見たユングフラウ山》1911年 ベルン美術館  
 Depositem der Gottfried Keller-Stiftung/Kunstmuseum Bern

#### 5. リズムの空間化—壁画装飾プロジェクト

ホドラーは、19世紀後半以降のヨーロッパに生じた装飾芸術運動の高まりの中にいました。チューリヒのスイス国立博物館のために制作したフレスコ壁画《マリニャーノの退却》(1897-1900年)、イエーナ大学を飾った《独立戦争に向かうドイツ学徒の旅立ち》(1907/08年)、ハノーファー市庁舎の会議室に据えられた《全員一致》(1911-13年)、そして再びスイス国立博物館の壁画として構想された未完の《ムルテンの戦い》と、ホドラーは歴史場面を主題とするモニュメンタルな室内装飾を生涯にわたって手がけました。これらの装飾プロジェクトにおいても、ホドラーは「パラリズム」の方法によって人物の形態を反復し、連鎖させることで、動的な画面を構成しようとしてきました。それは絵画という平面において生じる視覚的なリズムを、いわば室内の「空間」にまで押し広げるような試みでした。それらの装飾プロジェクトを、習作とともに見ていきます。



9. 《木を伐る人》1910年 ベルン、モビリアール美術コレクション

## 6. 無限へのまなざし—終わらないリズムの夢

装飾画家としてのホドラーは、1913年から1917年にかけて、チューリヒ美術館にある階段間のための壁画を制作します。最終的に5人の女性像によって構成されたその壁画は、画家自身によって《無限へのまなざし》と名づけられました。そこには、集団舞踏を思わせるイメージが描かれています。互いに類似する身ぶりをした女性たちが、水平方向に連鎖していくのです。それはおそらく、晩年を迎えつつあった画家が見た、終わらない「リズム」の夢でした。ホドラーの生涯におけるハイライトとなったその作品を、習作によって概観します。



10. 「無限へのまなざし」の単独像習作 1913-1915年  
 ジュネーヴ美術・歴史博物館  
 ©Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève ©Photo: Bettina Jacot-Descombes

## 7. 終わりのとき—晩年の作品群

折しも《無限へのまなざし》を制作していた頃、ホドラーは癌におかされた20歳年下の恋人ヴァランティーヌ・ゴデ＝ダレルの死を見つめていました。彼は、刻々と衰えていく病床のゴデ＝ダレルの姿を素描によって記録し、ついには死した彼女を、まるでキリストの遺骸のごとく描きました。そして、そのゴデ＝ダレルの死から3年後の1918年、ホドラー自身も彼女を追うように、ジュネーヴで没します。けれども、恋人の死に立ち会った晩年のホドラーは、決して悲哀に沈んだのではありません。彼はそれ以後も、アルプスの風景と変わらず向き合いながら、しかしそれらを、かつてよりもいっそう抽象化した色面と表現主義的な色合いで描きました。



11. 《白鳥のいるレマン湖とモンブラン》1918年 ジュネーヴ美術・歴史博物館  
 ©Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève ©Photo: Yves Siza

## 関連行事

### 記念講演会

①「自然と響き合う生命—ホドラーの芸術」(仮)

1月25日〔日〕午後2時～(約90分)

講師：高階秀爾氏(東京大学名誉教授・大原美術館館長)

②「リズムが求められるとき—フェルディナント・ホドラーと同時代の芸術思想」

3月8日〔日〕午後2時～(約90分)

講師：新藤淳氏(国立西洋美術館研究員・本展日本側企画監修者)

いずれもミュージアムホールにて

聴講無料(定員先着250名・要観覧券)

### ホドラー展おやこ解説会

2月14日〔土〕午後1時30分～(約30分)

レクチャールームにて 参加費無料(定員先着100名)

### こどものイベント

3月7日〔土〕午前10時30分～午後3時30分

アトリエ2、展覧会会場にて

要予約・要参加費

お問い合わせ・お申込み：こどものイベント係 TEL 078-262-0908

### 学芸員による解説会

1月31日〔土〕、2月14日〔土〕、2月28日〔土〕、

3月14日〔土〕、3月28日〔土〕

午後4時から(約60分)

レクチャールームにて 聴講無料(定員先着100名)

### ミュージアム・ボランティアによる解説会

会期中毎週日曜日 午前11時～(約15分)

レクチャールームにて 聴講無料(定員先着100名)

※詳しい情報は当館ホームページをご覧ください。

## 広報用画像について

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。別紙の申込書をご使用ください。

## 同時開催の展覧会

県美プレミアム

阪神・淡路大震災20年展

**阪神・淡路大震災から20年**

11月22日〔土〕～2015年3月8日〔日〕

会場：兵庫県立美術館 常設展示室

## 横尾忠則現代美術館での同時開催

阪神・淡路大震災20年展

**横尾忠則 大涅槃展**

2015年1月24日〔土〕～2015年3月29日〔日〕

※特別展又は、県美プレミアムのチケット半券のご提示で、団体割引料金でご覧いただけます。(詳細はホームページなどでご確認ください)

## お問い合わせ先

兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

代表 TEL: 078-262-0901 FAX: 078-262-0903

<http://www.artm.pref.hyogo.jp>

<http://hodler.jp/> (展覧会公式ホームページ)

企画内容に関すること

担当学芸員：相良周作・岡本弘毅

TEL: 078-262-0909 FAX: 078-262-0913

取材・写真提供に関すること

営業・広報グループ

TEL: 078-262-0905 FAX: 078-262-0903

## 交通案内

阪神岩屋駅(兵庫県立美術館前)から南に徒歩約8分

JR神戸線灘駅南口から南に徒歩約10分

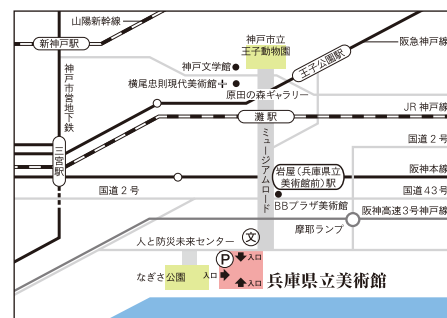
阪急神戸線王子公園駅西口から南西に徒歩約20分

J R三ノ宮駅南から神戸市バス(29・101系統)・阪神バスにて約15分 HAT神戸方面行き「県立美術館前」下車すぐ

地下駐車場: 乗用車80台収容・有料

※ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください

※団体バスでお越しの場合は、バス待機所の予約をお願いします



広報画像申込書

営業・広報グループ 宛 FAX (078) 262-0903

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1 電話 (078) 262-0905 (直通)

ご希望の画像の番号に○をつけてください。後日データ (.jpg) をお送りいたします。

番号	作品名・制作年・所蔵 など
1	《バラのある自画像》 1914 年 シャフハウゼン万聖教会博物館
2	《昼 III》 1900   10 年頃 ルツェルン美術館 Museum of Art Lucerne, depositum of the Bernhard Eglin-Stiftung ©Andri Stadler
3	《傷ついた若者》 1886 年 ベルン美術館 Kunstmuseum Bern, Geschenk des Künstlers
4	《恍惚とした女》 1911 年 ジュネーヴ美術・歴史博物館 ©Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève © Photo : Bettina Jacot-Descombes
5	《感情III》 1905 年 ベルン州美術コレクション ©Kanton Bern (Prolith AG, Bern)
6	《オイリュトミー》 1895 年 ベルン美術館 Kunstmuseum Bern, Staat Bern
7	《シェーブルから見たレマン湖》 1905 年頃 ジュネーヴ美術・歴史博物館 ©Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève ©Photo: Yves Siza
8	《ミューレンから見たユングフラウ山》 1911 年 ベルン美術館 Depositum der Gottfried Keller-Stiftung/Kunstmuseum Bern
9	《木を伐る人》 1910 年 ベルン、モビリアール美術コレクション
10	《「無限へのまなざし」の単独像習作》 1913-1915 年 ジュネーヴ美術・歴史博物館 ©Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève ©Photo: Bettina Jacot-Descombes
11	《白鳥のいるレマン湖とモンブラン》 1918 年 ジュネーヴ美術・歴史博物館 ©Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève ©Photo: Yves Siza

※上記画像を媒体掲載される際には、記載の**作品名・制作年・所蔵**などを必ず入れてください。

※作品画像は**全図で使用**してください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・変更はできません。

※画像データ使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。それ以外での使用はできません。(展示終了まで)

※再放送、転載など 2 次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。

※Web サイトに掲載する場合は必ずコピーガードを施してください。

※基本情報、図版使用の確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で営業・広報グループまでお送り願います。

貴社名			
媒体名	新聞・雑誌・ミニコミ	『	』
	TV・ラジオ・インターネット		
ご担当者名			
ご住所	〒		
電話番号		F A X	
メールアドレス	@		
URL			
掲載・放送予定日		画像到着希望日	
読者・視聴者プレゼント用招待券 (最大 5 組 10 名まで 本展を媒体でご紹介いただける場合に限り)		組	名分希望

※本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体 (VTR/DVD)、URL などを、上記営業・広報宛にお送り願います。

※展覧会場の取材、撮影をご希望の場合は、上記までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。